

【LGS 報告書 : 2017 年度 海外研修 (WHO, Geneva 欧州研修)】

実施日	2017/09/24-9/29
氏名	南塚 拓也
【研修要約】	<p>1 日目は WHO で、国連で働くこと、WHO の仕事、WHO の食品安全対策、科学研究と WHO の役割、ポリオ撲滅、インターン生活についての話をうかがった。</p> <p>2 日目は Global fund、国際赤十字・赤新月社連盟 (International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies: IFRC)、国際労働機関 (International Labour Organization: ILO) の順に各機関を訪問し、それぞれの果たす役割について話をうかがった。各機関を訪問した際は、学生より千葉大学の紹介を行った。最後に在ジュネーブ日本政府代表部を訪れ、国連職員になる方法について話をお聞きし、国連・国際機関日本人職員の皆様と交流した。</p> <p>3 日目は国際連合ジュネーブ事務局 (United Nations Office at Geneva: UNOG) の見学ツアーに参加した後に、WHO へ移動し研修についてディスカッションを行った。</p>
【印象的な研修内容】	<p>薬剤耐性 (Antimicrobial resistance: AMR) についての話が印象的であり、述べることにする。人に対する不適切な抗微生物薬の使用により、病院内を中心に新たな薬剤耐性菌が増加しており、動物においても薬剤耐性菌は動物に対する治療効果を減弱し、さらに畜産動物を介して人に感染する可能性がある。2050 年までに何もしなければ 1000 万人/年が AMR で亡くなる。</p> <p>G7、G20 サミットでは大統領レベルに AMR の議題が上げられている。G20 サミットでは準備担当官会議である Sherpa Meeting が開催されており、今回 WHO も参加していた。</p> <p>外科手術や化学療法の場合でも抗生剤を使用する機会があるが、耐性菌が増加すれば、今まで容易に可能であった外科手術や化学療法でさえ困難になる可能性がある。抗菌薬のガイドラインを作るだけでは AMR を制圧できない。人に投与される抗菌薬は 3 分の 1 程度であり、人間より農業に 2 倍以上使われている。飼料に抗生剤を混ぜると、感染症の予防のみでなく、動物の成長が促進されるという理由で、家畜に抗生剤が使われている。ウシ、ブタ、ニワトリ、サケなど家畜の体内の耐性菌が土壌中など環境に広がり、食事を通して人にも広がる可能性がある。</p> <p>Low income country の薬局では医師の処方なくても抗生剤を購入でき、そのような国が人口の 80% を占めている。医師による処方が行われているのは先進国のみである。各国の抗生剤の消費量をモニターする必要があり、そのような機関の設置が急務である。抗生剤の使用を減らせば耐性菌が減少するのか、人、動物、食品すべてでのサーベイランスが行われている (integrated surveillance of antimicrobial resistance in foodborne bacteria)。</p> <p>新しい抗生剤が開発されないことが問題である。まず、技術的に新薬の開発が難しい。また、return on investment が見込めないという問題がある。高価な抗生剤について、知的所有権で守られているが、</p>



研修先の風景



AMR がどのように広がるか

公衆衛生上の利益のためには広く使われるべき、という問題点もある。製薬会社において、抗癌剤や生活習慣病治療薬などに比較して、抗生剤は収益が少ない。Market failure によって新薬生産につながっていない。G20 では新しい market mechanism を作ることに合意がなされ、5~10 年後には創薬に結びつくことが期待される。

【研究活動への展開について】

私は現在博士課程 1 年で、生活習慣病に関する研究を行っている。今回の研修でメインテーマではなかったが、western food が浸透し野菜を食べる習慣や運動習慣がないために、途上国では 20 年後には感染症よりも生活習慣病の方が悪化する可能性があるという話も印象的であった。国際機関で働いている方々のように、専門性や語学力に加えて、強い信念を持ちながら、自分の選択した道へ進んでいきたいと感じた。